

本格的な朝鮮人作家の日本語作品資料集成、第二期刊行！

写真（上から崔承喜・李人植・李光洙）



大村益夫・布袋敏博 編・解説

近代朝鮮文学

第二期

一九〇二年～一九三八年

全八巻

日本語作品集

創作篇（全五巻）

第一回配本

評論・隨筆篇（全三巻）

第二回配本



緑蔭書房

『近代朝鮮文学日本語作品集』(第二期)刊行にあたって

『近代朝鮮文学日本語作品集』(一九〇一〜一九四五)を二期に分けて刊行する。今回刊行の第二期は、一九〇一年から一九三八年一月末日まで、朝鮮人によって書かれた日本語の作品と、日本語に翻訳された作品を選択、集成したものである。作品は可能な限り初出から採り、新たに発掘した資料も少なくない。また、文学作品に限らず、文学者の少年時代の投稿文なども資料として収録した。

対象とした時代は、朝鮮人文学者たちが、様々な理由から日本に渡り、日本語での作品を著し始めた頃から、プロレタリア文学運動で日朝の文学者が交流を深めていた時期、さらには植民地末期に差し掛かる直前まで、長期にわたる。その中には、李光洙の日本語による「五道踏破旅行記」など、朝鮮近代文学の成立を考える上で重要な意味を持つと思われる作品も発表されている。

さらには、一九三五年を前後する『大阪毎日新聞』の各種特集など、日本の対朝鮮政策の変化、風土醸成を反映した現象などもそこに窺われ、興味深い。こうした流れはまた、朝鮮近代文学史を透かし彫りにするかのようでもある。

近年、旧植民地、日本の占領地域での文学活動に対する関心が高まってきているが、多くは日本文学の補完という観点からであるように見受けられる。朝鮮文学においても、そうした観点から編まれた資料集、作品集がいくつか見られるが、本選集は、あくまでも朝鮮文学の視点から編集されたものであることを付記しておきたい。研究の一助となれば幸いである。

二〇〇四年六月

推薦文

この作品集はまたひとつの事件である

金 在湧



創作篇(主要収録作品)

第一巻(小説) 一九〇二年一月〜一九三八年八月

寡婦の夢「都新聞」李人植
愛か「白金學報」李寶鏡 李光洙
餓頭賣ノ子供(1)〜(3)「新文界」樂天子
叫び「京城日報」秦隣星(秦學文)
血戦の前夜「新興文學」二十九集・藝術戦線「鄭然圭
合宿所の夜(上)(下)「滿洲日日新聞」雪野生(韓雪野)
暗い世界(1)〜(5)「滿洲日日新聞」雪野廣(韓雪野)
答の下を行く「文藝戦線」金熙明
廢邑の人々(1)〜(30)「京城日報」崔允秀
緋に染まる白衣「進め」辛仁出
他23編

第二巻(小説) 一九一八年八月〜一九三〇年一〇月

無情(1)〜(24)「朝鮮思想通信」李光洙
彼は凝視する「文章俱樂部」金近烈
馬鈴薯「文章俱樂部」金東仁
苦力「戦旗」金英根
移住民(1)〜(4)「進め」金光旭
啞者の三龍「週刊朝日」羅稻香
放浪息子(上)(中)(下)「釜山日報」安鍾彦
大森の追憶(1)〜(7)「釜山日報」石井薫(李石薫)
インテリゲンチヤ(1)〜(5)「社會福利」金熙明
白揚木「大地に立つ」張赫宙
他19編

第三巻(小説) 一九三一年九月〜一九三五年二月

餓鬼道「改造」張赫宙
流れ「若草」日夏英太郎(許泳)
味方―民族主義を蹴る「プロレタリア文學」朴能
ユエビンと支那人船夫(1)〜(7)「京城日報」李石薫
婆さん「清涼」吳泳鎮

日帝下、朝鮮人により書かれた日本語作品は、この間、朝鮮近代文学の範疇から除外されてきた。もちろん

人間歌的に日本語で書かれた作品が論議の対象となりはしたが、極めて部分的に扱われたに過ぎなかった。日本語作品がこのように研究者たちの視野に入らなかったのには、言語民族主義が大きく作用している。朝鮮語で書かれた作品のみを朝鮮文学であるとみなす、近代以後続いてきた言語民族主義は、日本語作品を受け入れることはできなかった。前近代の時期に、漢文で書かれた作品が朝鮮文学とみなされたのとは異なり、近代以後の文学では、朝鮮語ではない作品は、徹底的に排除されていたのがこの間の現実である。

こうした傾向をいっそう加速させたのは、日本語で書かれた作品は、イコール親日文学であるという判断であった。日本語で書かれた作品が集中的に発表された時期が一九三九年から光復までであり、この時期は日本の植民主義が「国語」としての日本語を強調し、朝鮮語をひとつの地方語とみなした時期であったため、日本語作品は、日本の強要に屈服したものであるという認識が一般的であった。それゆえ、日本語で書かれた作品は、当然に親日協力の文学であるとみなされ、またこうした作品を発表する作家は親日作家という烙印を押されたのである。したがって、日本語作品は長い間沈黙の中に閉じ込められていた。

ところで、最近にいたって、こうした通念に亀裂が生じ始めた。まず、日本語作品が無条件に親日協力の文学であるという考えが重大な挑戦を受けるようになった。日帝末の日本語作品に対する具体的な検討の結果、日本語で書かれた作品だからといって、すべて親日協力の文学ではないという点が明らかにされたのである。日本語で書かれた作品の中で、一部は親日協力の性格を強く帯びている反面、他の多くの作品は非協力的な、抵抗的な側面を示していた。こうした雰囲気を得て、最近の朝鮮近代文学研究では、日帝末に発表された日本語作品と、これを書いた作家に対する深い研究が始まり、多様な見解が出されている。

この過程で、既に刊行されている大村教授と布袋教授が編集した『近代朝鮮文学日本語作品集』（第一期、一九三九—一九四五）が、資料的次元で大きく寄与した。この間、朝鮮近代文学界では、日本語作品に対する認識が薄かったために、資料の収集もおろそかであった。いち早く日本語作品が朝鮮近代文学において持つ重要性を認識し、この方面の資料を収集してきた二人の教授の努力により、韓国の研究者たちは勞せずしてこれらの資料を活用することができたのである。

朝鮮近代文学史において、日本語作品についても本格的に論議しなければならないという認識が徐々に広がり、近代以後の朝鮮文学における日本語作品に対する新しい視角を模索する動きが活発になってきている。李人植の日本語作品を始め、多くの朝鮮文学者たちが日本語で書いた作品に対する全般的な研究が急速に起こってきているのも、まさにこうした文脈からである。しかしながら、こうした意欲にもかかわらず、日本語作品に具体的に接近するのが容易でないことから、日本語作品の研究は難航するほかなかった。

そうしたところへ、このたび大村、布袋両教授が、先の資料集に続いて一九三九年以前に出された作品を集めたこの集成は、今後のこの方面の研究にあつて極めて重要な、基本資料となるものと思われる。これは明らかに、日本での朝鮮近代文学研究が、韓国の近代文学研究に刺激を与える、またひとつの事件であることに間違いない。

(キム ジェヨン・韓国国光大学教授)

ベタラギ(舟唄) (1) (9) [大阪毎日新聞朝鮮版] 金東仁
紅焰 (1) (10) [大阪毎日新聞朝鮮版] 崔鶴松(崔曙海)
B 舍監とラヴレター (1) (4) [大阪毎日新聞朝鮮版]
玄鎮健

初陣 [文學評論] 李兆鳴(李北鳴)
聲 [文學評論] 鄭遇尙

探偵小説家の殺人 [ぶろふいる] 金來成
他18編

第四卷(小説) 一九三六年二月—二月

渦巻の中 [麵麴] 崔東一
真相 [城大文學] 吳泳鎮
顯富者 (1) (6) [大阪毎日新聞朝鮮版] 白信愛
日蔭 (1) (5) [大阪毎日新聞朝鮮版] 崔貞熙
子守唄 (1) (9) [大阪毎日新聞朝鮮版] 張德祚
下宿 (1) (6) [大阪毎日新聞朝鮮版] 盧天命
洪水前後 (1) (8) [大阪毎日新聞朝鮮版] 朴花城
苦行 (1) (8) [大阪毎日新聞朝鮮版] 金末峰
長山串 (1) (5) [大阪毎日新聞朝鮮版] 姜敬愛
萬爺の死 [改造] 李光洙
半島の藝術家たち (1) (8) [サンデー毎日] 金聖珉
土城廊 [提防] 具珉(金史良)
他13編

第五卷(小説) 一九三七年一月—一九三八年六月

故郷(全四回) [文學案内] 李貫永
裸の部落 [文學案内] 李北鳴
金講師とT教授 [文學案内] 玄民(兪鎮午)
白い開墾地 [文學案内] 韓雪野
蕎麥の花の頃 [文學案内] 李孝石
尹參奉 [帝國大學新聞] 具珉(金史良)
或下男の話—秋の夜長物語 [麵麴] 崔東一
草堂 [文藝首都] 孫東村
人生行路難(上下) [朝鮮及滿洲] 金明淳
東京の片隅で [文藝首都] 青木洪(洪鍾羽)
他4編

朝鮮近代文学と言語の可能性

波田野節子

二葉亭四迷がロシア語と、森鷗外がドイツ語と出会わなかったら、はたして『浮雲』や『舞姫』は明治時代にあのような形で出現しただろうか。

近代日本文学は西洋の言葉との出会いによって生まれたと言っても過言ではない。その精髓を自分たちの言語で表現しようとした明治の作家たちの努力の痕跡は、私たちが使っている現代日本語のあちこちに潜んでいる。

二十世紀の初頭に新小説を著して「朝鮮近代小説家の祖」と呼ばれた李人種は、都新聞の見習をしていたころ、同新聞に日本語小説『寡婦の夢』を発表し、朝鮮の近代長編小説の嚆矢とされる『無情』の作者李光洙は日本留学時代に明治学院中学の校誌に『愛か』を投稿している。『無情』を書いたころの李光洙の日本語創作水準がどれくらい素晴らしいものであったかは、同じ時期に日本語新聞に連載された紀行文『五道踏破記』が証明するところである。近代文学草創期の作家たちのこうした言語経歴が韓国における近代文章語の成立にあたえた影響は小さくないと思われる。

だが、植民統治末期の日本語創作に対する忌まわしい記憶がこの二作家の人生の軌跡と重なり合ったこともあって、これまでこうした面には十分な関心が向けられなかった。

今回刊行される第二期分（一九〇一〜一九三八年）に収められたこれらの初期資料は、文学や歴史のみならず言語学の分野においても大きな意味をもつ貴重な資料である。

第二期分には、このほか一九二〇年代から三〇年代にかけての日本と朝鮮のプロレタリア文学陣営の連帯を象徴する作品群や、三〇年代中盤に起きた朝鮮小説の翻訳ブームの名残である作品群などが取められている。作品目録に目を通してみて、これほど多様な作品が翻訳されていたことにあらためて驚いた。有名な、兪鎮午の『金講師とT教授』と李孝石の『蕎麦の花の頃』は「作者自訳」である。日本に留学していない彼らが、自分の作品を自ら見事な日本語に翻訳していることに複雑な驚きを味わったが、それと同時に、李人種や李光洙の場合もそうだが、朝鮮語で彼らが創作するさいの彼らの高度な日本語能力はどのような作用を及ぼしたのかという点や、逆に、彼らのように優れた作家たちが日本語の表現能力を広げてくれた可能性に對しても想像力を刺激させられた。

半世紀の不幸な歴史の中で生まれたこれらの日本語作品は、言語の可能性という点で見たととき、日本と朝鮮の歴史の流れに浮かんで咲いた痛ましくも美しい花々と言えるのではないだろうか。

（はたの せつこ・県立新潟女子短期大学教授）

評論・随筆篇（主要収録作品）

第一巻（評論） 一九〇四年一月〜一九三四年八月

朝鮮の農業(上)〔都新聞〕無記名

鮮人の草したる寄稿(1)(2)〔朝鮮新聞〕南宮壁

朝鮮の諸公に訴ふ「テモクラシイ」廉尚燮(廉想涉)

ミューズを尋ねて「清涼」兪鎮午

動く魂と生活「獄水會雜誌」金斗鎔

朝鮮の農民歌謠(1)〜(5)〔未完〕〔地上樂園〕金教煥(金素雲)

不成文化論「朝鮮思想通信社」崔南善

朝鮮に於ける無産階級藝術運動の過去と現在「プロレタリア藝術」李北滿

□レタリア藝術」李北滿

若き朝鮮人の願ひ(1)〜(12)「朝鮮思想通信」李光洙

プロレタリア詩の現實問題について「地上樂園」白鐵

朝鮮に於ける近代劇運動の終焉「プロレタリア科學」林華(林和)

朝鮮に於けるプロレタリア藝術運動の現勢「ナツ」安漢

他82編

第二巻（評論・隨筆）

評論 一九三四年七月〜一九三八年二月
隨筆 一九〇一年二月〜一九三八年九月

詩におけるモダニズム「大阪毎日新聞朝鮮版」金起林

インテリゲンチヤ論はなぜ擡頭したか「生きた新聞」金斗鎔

朝鮮と文學 II 一九三五文壇の回顧「文學評論」朴勝極

朝鮮新劇運動の動向「アクト」安英一

「春香傳」を見る「京城日報夕刊」柳致眞

夢中放語「都新聞」李人種

（無題）特別寄贈作文「富の日本」李寶鏡(李光洙)

霧の朝「白金學報」朱耀翰

秋の石坡亭「京城日報夕刊」秦隣星(秦學文)

アカシヤの樹蔭に沐みする女「大阪朝日新聞夕刊」金英一

満月臺「手帖」馬海松

荷「卒業記念誌」(佐賀高校文乙)金時昌(金史良)

虚無を感じる「京城日報朝刊」張赫宙

他105編

本作品集「第二期」の編集方針と特色

- ▼ 作品は、一九〇一年から一九三八年二月末日までに発表されたものから選んだ。ただし、創作篇（第一回配本）の作品は一九〇二年から収録した。
- ▼ 作品は初出のものを採ることを原則とした。
- ▼ 小説、評論、随筆、戯曲にとどまらず、紀行、座談会、書簡など、資料的価値の高いものは、ジャンルを問わず幅広く取り上げた。
- ▼ 収録資料は今回、大部分が戦後初めて公刊されるものばかりである。
- ▼ 作品選択にあたっては、作品の質を重視し、最初から日本語で書かれた作品ばかりではなく、日本語に翻訳された作品も対象とした。
- ▼ 長篇小説は収録しないのを原則としているが、「無情」と「故郷」の翻訳はその意味を考慮して例外として収録した。
- ▼ 崔承喜の『私の自叙傳』は全巻収録した。
- ▼ 収録作品は原則として日本と朝鮮半島で発表されたものに限ったが、例外として韓雪野が「満洲」時代に『満洲日日新聞』紙に発表した三篇の小説は収録した。
- ▼ 構成は創作篇と評論・随筆篇とし、その内容は次の通り。
 - 創作篇—小説—三〇編を収録。収録作家は七四人、採録新聞・雑誌は四五誌・紙。
 - 評論・随筆篇—評論一五五編、随筆七五編、紀行一四編、戯曲六編、座談会三編、社説八編、作文二〇編、通信・ルポ・報告・日誌類一九編、アンケート・書簡・趣意書ほか三一編を収録。収録作家は一一七人、採録新聞・雑誌・単行本数は九〇紙・誌。
- ▼ 植民地化朝鮮の諸問題が作品の主題として取り上げられており、歴史研究者が当時の朝鮮社会の内情や朝鮮知識人や民衆の被抑圧者側の心情を汲みとる上でも貴重な資料。
- ▼ 近代朝鮮文学研究の第一級資料にとどまらず、近代日本文学研究や在日文学の系譜を辿る上でも貴重な資料群である。

第三卷(随筆・他)一九三六年一月〜一九三八年二月

私の自叙傳(日本書社)崔承喜

清涼里界限(四回)「毎日申報夕刊」鄭人澤

五道踏破旅行記(全三六回)「京城日報朝刊・夕刊」李光洙

釋王寺へ(上)(中)(下)「京城日報夕刊」秦隣星(秦學文)

移民村訪問記(全八回)「京城日報朝刊」石薫生(李石薫)

白頭山紀行(1)〜(12)「京城日報朝刊」李益相

戯曲 黄昏の村「アトク」金丹美

カッパ轉向者座談會「法政新聞」

感謝と不満「文藝戦線」韓雪野

書簡「斎藤實文書」李光洙・崔南善

宣言・決議「京城日報」時局對應全鮮轉向者聯盟

他108編

朝鮮思想通信

主要作家の略歴

崔承喜(チエ・スンヒ)

一九一三年〜一九六九年没。ソウル生まれ。舞踊家。二六年、淑明女学校を卒業。同年、「京城」に公演に来た石井漠たちの踊りを見て入門、日本に渡る。その後独立して活動を始め、絶大な人気を得る。解放直後、南朝鮮で活動を再開しようとするが、植民地期の活躍が「親日」行為とみなされて、果たせず、夫安漠に従い越北。以後、活動の場を北部朝鮮に移す。今日見られる同地での舞踊の基礎を作ったとされる。舞踊家同盟中央委員会委員長などを歴任。一九六七年頃批判を受け、公的な場から姿を消した。長い間、その後の消息がわからなかったが、近年名誉回復がなされ、没年が明らかになった。随筆もよく、相当数の文章を残している。

寡婦の夢

韓人 李人植稿
麗水補

其上

西の山に入り懸りし夕陽ハ今しもちぎれ雲の周
圍に金色の符縁をつけ、間を渡る一道の光線ハ
唯ある塔高く闊深き家の西の窓なる欄干を照し
たり、其の中に一際眩しく白き色を誇るものハ
春風の白牡丹にもあらず雪裡の寒梅花にもあら
ず、唯一箇素服の婦人が悄乎と欄干に依りて西
天の雲を眺め居るにありき(朝鮮の人ハ男女
に論なく其の父母の喪にハ素き服を着ること三
年なり但し出で嫁ぎし女ハ其父母の喪にハ素を
服すること一年、一年の後にハ淡青衣を着、三
年の後にハ平生の通り華麗な衣を着るなり、寡
婦のみハ生涯素を服すなり) 齡ハ三十三、色
白く面細く蒼氣なき髪、粧はざる眉ハ朝鮮の婦
人ハ望き目を眩ひ皆ハ其目を睨うず、所習所

きたれば美人に見えて美人にあらず病人らしく
見えて病人ならず
寡婦ハ雲を看めて風前に對うてほつと太息した
りしが暮れ行く空を遊ぶ雲に無言の根を寄せた
る様言いも知らず傷まじげなり、何が故に彼蒼
の雲を眺め何事をか思ひ居るら、春づきたりし
夕陽ハやがて西の山に隠れ、夕棠に暮れ残る片
雲の高きハ燃ゆるばかりに紅く低きハ山の影の
沈黒と共に黒みたり
長く曳きたる雲の上には又た佛の姿したる
群雲ありて寶華殿裡に頭を羅べて下界を看むる
ごとくなり、素服の婦人の限りなき愁、窮まり
なき思ひ、たごへ万疊の雲深しといへども、此
の胸中愁思の深くして多きに及ばず
「ア、妾の亡父ハ慈悲深い親切な人であつた
から亡なられても地獄さう、劍の山さう、そ
んな處に居る道理がない、屹度仙官になつて
くたがらぬやうに願ふが、



長山串

姜敬愛作
李承萬畫

【第一回】

黄海の方に向つて、ゆつと出つ張つてあ
る長山に附まれた釜金の輝しい漁村は、こ
かし賑かに賑つてゐる。

李三は飽つた空を見上げては、黙々元氣の
ない足を運んでゐる。落着んだ服を落して
何か物思ひに沈んでゐる様子や、ひどく堪
みたる着物を着てゐる體態のみすばらしい體
からして、なんとなくとくどい極めたなといふ
感じしか興ない。

(今度行つて聞いてくれなかつたら、いよ
く首でもくらうし)

と、思つては見るものも門限はさう間狭な
ものではなかつた。

(彼も血の通つてゐる間だつたら、今度
といふ命は、まさか拒絶しないだらう。少し
くらの綱を断つたといふ口實で私をこんな目



に遭はしてゐるが、實は志村に對する恨強い



筆者経歴 姜敬愛(女史)は黄海道長
淵生れ、平
陽里義女學
校出身、六
年前に慶安
作「母と子」
を發表して
文壇に初登場、自來創作につとめ、
藝術的筆風の高い幾多の各篇を出し長
篇「人間問題」短篇「下村」の如
きその代表作である(寫眞は姜女史)

感傷からだ。きつとさうなんだ。だからちや
頼んだら聞いてくれるに違ひない。それに海
産物を大積に滿洲國へ輸出するようになった
といふ話だ。それで、えらい涙が出で、ど
んく漁船を雇つてゐるさうぢやないか。だ
から今度こそは多分大丈夫だらう。

彼は昨夜一晩中考へ通したことを、歸還し
編返し考へ直して見れば、ほつと溜息をつく
のだった。諦めんとして諦めることの出来な
い經濟的最後の悶である。

彼の影になつてゐる漁業組合のトマン層根
が鋭く光つて見え、漁場からなまぐさい興

創作篇 第1巻収録(第1回記本)

創作篇 第4巻収録(第1回記本)

李人植(イ・インジク)

一八六二年〜一九一六年没。小説家、新聞発行者、
演劇家。韓山李氏胤善と全州李氏の間次男として
生まれる。一九〇一年、ジャーナリズムの勉強に渡
日。都新聞社(現・東京新聞社)で見習生として従
事する傍ら、松本君平の政治学校に学ぶ。日本留学
中、現在判明している限り朝鮮人として最初の日本
語小説「寡婦の夢」(〇二)を發表する。陸軍の通
訳官なども務めていたが、〇四年帰国。帰国後、〇
六年には新小説の嚆矢とされる「血の涙」を「萬歳
報」紙に連載。ジャーナリズム・演劇にも関心を示
し、朝鮮の地で新聞の発行、演劇改良の運動などを
行なう。李完用の秘書的な役割を果たし、日韓併合
前後には彼の通訳として働いた。こうした履歴が、
彼の文学作品の後世の評価にも影を落としている。

李光洙(イ・グワンソ)

一八九二年〜一九五〇年没。平安北道定州生まれ。
幼名「寶鏡」(ボギョソ)。号は「春園」(チュノソ)。
創氏名「香山光郎」。近代朝鮮を代表する文学者。
日本留学中、自身の最初の小説で日本語による短篇
「愛か」(〇九)を書く。彼の日本語作品は一九三九
年以降に集中しているが、それ以前にもいくつかあり、
中でも一七年に代表作の長篇「無情」を「毎日
申報」紙に連載した直後から「京城日報」に日本語
で発表した「五道踏破旅行記」は重要な意味を持つ
と思われる。三十七年の修養同好会事件以後、親日的
な立場に傾斜する。朝鮮戦争中拉北。五〇年に病死
したとされる。

その他の主な作家

- 姜敬愛
- カン・ギョソ 1907〜1943
- 具根(金史良)
- ク・ミン(キム・サリヤン) 1914〜1950

近代朝鮮文学の成立から形成への重要資料を集成

大村益夫・布袋敏博編・解説

近代朝鮮文学

日本語作品集

第二期

一九〇一年〜一九三八年

全八巻

創作篇(全五巻)

—— 第一回配本 (二〇〇四年八月刊)

- 第一巻 小説 三三編 三三二頁
- 第二巻 小説 二九編 四六八頁
- 第三巻 小説 二九編 三七〇頁
- 第四巻 小説 二五編 四四四頁
- 第五巻 小説 一四編+解説 三五四頁

〈体裁Ⅱ編集復刻版・A5判・上製クロス装・ケース入り〉

第一回配本価格◆本体56,000円+税(分売は致しません)

ISBN4-89774-059-2 C3097

評論・随筆篇(全三巻)

—— 第二回配本 (二〇〇四年九月刊)

- 第一巻 評論 九四編 四〇〇頁
- 第二巻 評論・随筆 一一八編 四〇〇頁
- 第三巻 随筆・戯曲・紀行・座談会・社説・通信他

一一九編+解説 四〇〇頁

* 評論・随筆編は収録篇数及び頁数に変更がある場合がございます。ご了承下さい。

〈体裁Ⅱ編集復刻版・A5判・上製クロス装・ケース入り〉

第二回配本価格◆本体34,000円+税(分売は致しません)

ISBN4-89774-060-6 C3097



第一期刊行のご案内

大村益夫・布袋敏博編・解説

近代朝鮮文学

日本語作品集

第一期

一九三九年〜一九四五年

全九巻

創作篇(全八巻) —— 本体68,000円+税(89774-031-2)

〈体裁Ⅱ編集復刻版・A5判・上製クロス装・ケース入り〉

評論・随筆篇(全三巻) —— 本体39,000円+税(89774-032-0)

〈体裁Ⅱ編集復刻版・A5判・上製クロス装・ケース入り〉

緑蔭書房

東京都板橋区板橋 1-13-1 ☎ 03(3579)5444

●下記の書店にお申し込み下さい。

Blank area for bookstore information.